



Title	文学教材を用いた講読とゼミの協業授業
Author(s)	田辺, 欧; 梅谷, 綾
Citation	外国語教育のフロンティア. 2024, 7, p. 187-196
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学教材を用いた講読とゼミの協業授業

Collaboration between Literature Seminar and Reading Class using Literary Materials

田辺 欧・梅谷 綾

要約

本稿は2023年度の秋～冬学期開講科目である「北欧文学特別演習Ⅰb」（田辺担当）と「スウェーデン語Ⅱb(B)」（梅谷担当）の協業による授業実践において用いる教材研究である。加えてどのような授業計画が各々の授業において有効か、相互補完的になりうるのかを個々の役割を踏まえつつ、展望するものである。授業内容としては、前者は「スウェーデン文学ゼミ」、後者は「スウェーデン語講読（フィクション）」に相当し、履修者はスウェーデン語専攻の3・4年生を対象としている。2つの授業で用いる具体的な教材および資料の選択経緯と意図を明らかにし、実践へのアプローチ、予想される問題点等を授業担当者がそれぞれの観点から考察する。

キーワード：文学演習、講読授業、スウェーデン文学

1. はじめに

「北欧文学特別演習Ⅰb」を担当する田辺は、デンマーク語専攻に所属している。1・2年次の実習授業においてはデンマーク語の授業のみを担当するが、3年次から始まる演習授業では、北欧文学ゼミを受け持ち、デンマーク文学のみならず、スウェーデン文学の原典テキストを教材として扱わねばならない。田辺にとっては、テキスト音読、統語論や形態論などデンマーク語とは異なるスウェーデン語独自の言語知識と理解が必要になる。そこでスウェーデン専攻の言語学を専門とする同僚にサポートを仰いだのがきっかけとなり、2019年度よりスウェーデン語講読授業との協業が本格的にスタートした。

今年度は梅谷が担当するスウェーデン語講読の授業と協業を行うことになった。梅谷が担当する講読授業において短編作品を言語教育の側面から精読し、田辺が担当するスウェーデン文学ゼミの授業においてその作品の文学分析、作品の周縁研究を行うことを計画する。次章からは、田辺、梅谷が①それぞれの授業で用いる教材の内容と選択意図について考察し、②実践授業計画を具体的に提示、③授業実践にあたっての展望と注意点をまとめる。

2. 教材

2.1 北欧文学特別演習b

田辺は3年次からの北欧文学ゼミに入る導入授業として、主に2年生を対象とした講義科目として、北欧文学概論a、bを開講している。その授業内容に関しては、本

誌 5 号の教育実践報告「スウェーデン語講読授業との協業による北欧文学ゼミの実践」(田辺欧・當野能之、2022 年 3 月 31 日発行)の 2 章「北欧文学概論における導入」の項目ですすでに述べているので繰り返しは避ける。この授業で扱う教材および資料は主に日本語で書かれたものである。北欧文学ゼミのスウェーデン文学の授業においては、2 年次の北欧文学概論 b で扱った作家の作品で、短編～中編作品を取り上げ、原語での先行研究や研究資料を用いて作品分析へと学びを進めることにしている。これまでに扱ってきたのは、時代順に挙げると、アウグスト・ストリンドバリ (August Strindberg, 1849 - 1912)、セルマ・ラーゲルルーフ (Selma Lagerlöf, 1858 - 1940)、ヤルマル・スーデルバリ (Hjalmar Söderberg, 1869 - 1941)、パール・ラーゲルクヴィスト (Pär Lagerkvist, 1891 - 1974) など、主に 19 世紀後半から 20 世紀前半に活躍した北欧の文豪と呼ばれる作家たちの作品である。その中で、これまでの協業授業で扱った教材はラーゲルクヴィストの短編小説「地獄に下るエレベーター」(“Hissen som gick ner i helvete”)と「地下」(“Källarvåningen”)、ラーゲルルーフの短編小説「軽気球」(“Luftballongen”)であり、その授業実践報告は先に述べた本誌 5 号に掲載している。

今年度は、協業の教材として 20 世紀のモダニズム作家カーリン・ボイエ (Karin Boye, 1900 - 1941) を扱うことにする。これまでは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての作家を扱ってきたが、今回は少し時代を進め、北欧のモダニズム期 (第一次世界大戦から第二次世界大戦の戦間期) に活躍した女性作家を取り上げる。文学ゼミで用いるのはボイエの詩と講読授業で読む短編小説である。短編小説の教材に関しては梅谷が後述することとし、まずは詩の教材および補助教材について考察する。

① 詩の教材

▶ Daniel Möller & Niklas Schiöler 編. *Svensk Poesi*. (邦題『スウェーデンの詩』) 2016 年.

教材内容と選択意図

『スウェーデンの詩』には、ルーン文字から現在活躍する若手詩人アテナ・ファロサード (Athena Farrokhzad, 1983 -) まで、200 人近い詩人と 650 の詩が収録されている。このアンソロジーには、スウェーデンの文学史上、よく知られた重要な詩がすべて収録されており、現代詩も数多く取り上げられている。編集者のダーニエル・ムッセルとニクラス・シューレルは、図書館所蔵の写本コレクションを発掘し、これまでのアンソロジーとは少し違った優先順位をつけたと序文で述べている。女性詩人やフィンランド系スウェーデン人の詩人のスペースを大幅に増やし、さらに、21 世紀の詩人の詩をより多く採択し、現代人にとってスウェーデンの詩が身近なものとなるように工夫を凝らし、索引を充実させている。

この中で、今期取り扱うカーリン・ボイエは、スウェーデン文学史上において女性詩人として重要な位置を占める。ボイエの詩は本書では 8 篇取り上げられている。これらは、ボイエが存命中に発表した 5 冊の詩集から、世間によく知られているもの、代表作となるものが選ばれている。これまでのスウェーデン文学ゼミにおいて、カーリン・ボイエの詩を卒論研究として扱った学生が過去に 1 名いる。その学生がすでに訳をつけ、考察に用いた詩が本書に 2 篇取り上げられていたため、それを除く 6 篇を

授業で扱うことにした。ゼミの授業では、1927 年発行の *Härdarna* (『火床 (ほど)』) から “Jag vill möta...” (『私は出会いたい…』) と “I rörelse” (『移ろい』) の 2 篇、1935 年発行の *För trädets skull* (『樹のために』) から “Nattens djupa violoncell” (『夜の深きチェロの音』)、1941 年発行の *De sju dödssynderna och andra efterlämnade dikter* (『七つの大罪と他遺稿詩集』) から “Odyssevs vid masten” (『帆柱のオデュッセウス』)、“Hur kan jag säga...” (『何と言えよのか…』)、“De mörka änglarna...” (『黒天使たち』) の 3 篇を訳し、分析する。

ボイエの詩をゼミで取り上げる意図と期待される効果は以下の 2 点に集約される。

- 北欧の詩を訳し解釈することは北欧文学ゼミの授業において 20 年以上、継続して行ってきた授業実践形態である。初期の頃は発表者が詩人と詩を自由に選び、北欧の詩人を紹介し、全員で詩を鑑賞することを慣例としていた。ところが年を経るにつれ、同じ詩人の違う詩を扱うことが多くなり、詩人の紹介を繰り返し行う必要性がなくなった。そこで、ここ数年は半期で扱う詩人を一人に決めている。未邦訳の詩を一人が一つ担当し、下訳を発表前に全員で共有、授業では担当者が原文の音読、日本語訳を読み上げたのち、全員が下訳へのコメントをはじめとし、質疑応答を行う。同時に訳者の解釈に対して議論を行うことにしている。全員が同じ詩人の詩に関わることから、詩言語の特性、訳語の選び方、比喩の用い方、モチーフ、テーマの共通性などについて互いの取り組みを共有できるため、議論がより活発になることが期待される。また今期取り扱うボイエは 20 世紀スウェーデン詩人の先駆者として、また今世紀の女性文学を牽引してきた重要な作家として教材として取り上げる意義がある。
- 詩を教材として扱うことは、小説とは違い、分量が少ないため、必ず一回で一つの作業を完結することができる。また詩の出典をめぐって、詩人の思想背景、時代背景についても議論する時間が生まれ、協業している梅谷担当の講読授業で扱う短編小説を読む際の一助となることが期待される。

② 補助教材

- Litteraturbanken: <http://litteraturbanken.se>
(文学銀行)
- Svenskt kvinnobiografiskt lexikon: <https://skbl.se/sv>
(スウェーデン女性人名事典)

「文学銀行」は王立図書館とスウェーデンアカデミーが中心となって運営される、ウェブベースのスウェーデン文学検索サイトである。文学ゼミにおいては、毎年学年の初めに、まずはこのサイトを活用する方法を学び、原語で作家および作品に関する詳細な情報、また先行研究などの資料を収集する。スウェーデン語による文学作品がネット上で閲覧できるようになっており、現在は著作権の切れた古典作家を中心に作家紹介と作品のデジタル化を行っているが、現代作家であっても著作権がクリアできている領域は掲載している。現代作家も掲載可能な範囲で紹介していることから、かなりのデー

データベースを有している。またフィンランドのスウェーデン文学協会もこのサイトの運営に参画し、スウェーデン語系フィンランド人作家の情報も提供している。スウェーデン文学について調査をするならば本サイトが最大級かつもっとも信憑性を有していると言えるだろう。またこのサイトには数年前から小中・高校生向けの教育サイト「文学銀行学校」(Litteraturbanken Skola) が新たに加わり、中等教育向けの教材や文献資料などが豊富で、学生にとってはより身近な参考資料として活用されている。

「スウェーデン女性人名事典」(Svenskt Kvinnobiografiskt lexikon: 通称 SKBL) は、2018 年に創刊されたスウェーデンのウェブベースの女性事典で、ヨーテボリ大学で制作されている。トップページにウェブページの概要(運営母体、プロジェクトの指針、記事の構成、執筆者、関係リンクなど) がかなり詳細に言及されている。このページを主導したのはヨーテボリ大学の文学研究者であるリースベッ・ラーション(Lisbeth Larsson) と同大学歴史研究者のマリーア・シュエバリ(Maria Sjöberg) である。プロジェクトチームはまず古い伝記的著作や研究文献を検討し、約 3000 人の女性をリストアップ、その後入手可能な資料が伝記記事としてどの程度十分かをチェックし、多数の芸術家や作家、参政権運動など歴史的に貢献した女性を中心に一旦 1000 人に絞った。現在はおよそ 2 倍の 2000 名近くの記事に拡大している。記事の内容は、基本的な伝記情報と活動に焦点を当てた解説記事によって構成されている。またフリーテキストやキーワード検索に加えて、社会的状況、時代状況を組み合わせて検索することも可能である。

カーリン・ボイエの記事は文学研究者グニッラ・ドンメルルーヴ(Gunilla Domellöf) によって執筆されている。ボイエの著作の特徴、作家活動はもちろんのこと、作家の思想背景についても要点が端的にまとめられている。本ウェブサイトが登場するまでは、1993 年から 1998 年にかけて出版された、全 5 巻、250 の記事と 850 人の著者から構成される百科事典 *Nordisk kvindelitteraturhistorie* (『北欧女性文学史事典』) が北欧全体の女性作家を網羅したものとして最大級かつ学術的な資料であった。しかしながら、内容が学部学生にとってはアカデミックすぎるきらいがあり、補助教材として用いるには不適切であった。本ウェブサイトは、3・4 年生が作家の基本情報を得るためには、分量が最適であり、文学だけではなく、様々な観点からのクロス検索が可能のため、利用価値が高いと判断できる。

2.2 スウェーデン語Ⅱ b (B)

梅谷は 2015 年度よりスウェーデン語専攻 3・4 年生向けのフィクション講読を担当しており、これまでは主に児童文学や現代の作家の短編小説を扱ってきた。2022 年度より 3・4 年生向けの講読のうちフィクションを扱う授業が梅谷担当の「スウェーデン語Ⅱ a (B)」(春～夏学期) と「スウェーデン語Ⅱ b (B)」(秋～冬学期) のみとなっていることがきっかけで、「スウェーデン語Ⅱ b (B)」では 19 世紀後半から 20 世紀前半に活躍した文豪と呼ばれる作家の作品も取り上げることにした。2022 年度の授業ではアウグスト・ストリンドバリ(August Strindberg, 1849 - 1912) とヤルマル・スーデルバリ(Hjalmar Söderberg, 1869 - 1941) の短編小説を扱った。

今年度の秋～冬学期はカーリン・ボイエの短編小説“Den blinda”(『盲目』) を扱う。この作品は 1934 年に発表された短編集 *Uppgörelser* (『論争』) に収録されている。また、

この作品を使用した語学教材がスウェーデンで出版されているため、今回はそちらを使用する。さらに、インターネット上で視聴できるボイエについての動画を補助教材として使用する。

① 講読の教材

- Sofi Tegsveden Deveau 著. *Den blinda / Karin Boye; novell med språkövningar*. (『カーリン・ボイエ著「盲目」；短編小説と語学練習問題』). 2019 年.

② 補助教材

- UR（スウェーデン教育放送）の番組 Svenska förklarad（「スウェーデン語解説」）のボイエについての動画（<https://urplay.se/program/218310-svenska-forklarad-karin-boye>）

教材内容と選択意図

講読の教材として使用する『カーリン・ボイエ著「盲目」；短編小説と語学練習問題』は *Lysande litteratur*（「名作文学」）という第二言語としてのスウェーデン語の語学教材シリーズの 1 冊である。この「名作文学」シリーズは CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の B2～C2 レベルの学習者を対象とした教材で、スウェーデンの文豪と呼ばれる作家たちの短編小説に古語や歴史的・文化的・地理的背景についての注釈がつけられているだけでなく、リスニングやスピーキング、ライティング、語彙の練習問題も用意されており、学習者の語彙力強化およびスウェーデンの社会や歴史への理解を深めることを目的としている。この教材は以下の 5 つのセクションから構成されており、授業の形式や回数、学習者のレベルなどに合わせて教員が必要なセクションを選択し組み合わせる使用ができるようになっている。

(1) 導入 (Introduktion)

作品を読む前の準備として、作品の歴史的・文化的背景やテーマを把握することを目的とした質問が用意されている。

(2) リスニング (Lyssna)

作品の朗読音声聞きその内容について答える三択問題とディクテーション問題が用意されている。朗読音声は出版社のホームページで聞くことができる。

(3) リーディング (Läs)

見開きの左のページに作品の原文、右のページに語彙リストが配置されている。左ページの原文には現在ではあまり使用されない表現や当時の時代的・社会的背景についての解説の注釈が添えられている。注釈付きの表現は知識として知っておくにこしたことはないが、学習者自身が習得し使用する必要はない。右ページの語彙リストは学習者が自ら辞書で意味を調べて書き込めるようになっている。

また、作品の内容に関する正誤問題、疑問詞疑問文に答える問題、作品の内容をさらに深く掘り下げてディスカッションや作文をするための設問も用意されている。

(4) 語彙練習問題 (Öva ord)

「(3) リーディング」の単語リストに載っている語彙を使った練習問題が複数用意されている。

(5) 原文全文 (Novellen i sin helhet)

一通りの学習を終えた後、注釈なしでもう一度原文を読み返すことで「文学作品を読む楽しみ」を味わうことを目的とする。

20 世紀前半の文学作品を読む場合、現代スウェーデン語の知識があれば、言語面ではある程度理解することが可能である。ただし、現在ではあまり使用しない古い表現や、当時の社会的・歴史的・文化的背景を把握していないと理解が難しい事柄がテキストに出てくることが多く、それらを理解するための調べものに時間がかかることがある。そのため、「(3) リーディング」のような注釈付きのテキストがあると学習者にとっては非常にありがたい。今回の授業ではこの注釈付きテキストを使用する。また、他のセクションも授業の進度などに合わせて適宜使用する予定である。

文学ゼミでは作家紹介文も取り上げるが、講読の授業には文学以外のゼミに所属する学生も多く参加するため、インターネットで視聴できる UR (Utbildningsradion、スウェーデン教育放送) の番組のボイエの人生について扱った動画を補助教材として使用する。UR はスウェーデンの公共放送グループに属する教育放送会社で、子ども向けの教育番組から大人向けの教養番組まで、様々なテレビ番組やラジオ番組を制作・放送している。UR の番組は SR (Sveriges Radio、スウェーデン・ラジオ) や SVT (Sveriges Television、スウェーデン・テレビ) のサイトやアプリ、そして UR のストリーミングサービス UR Play のサイトやアプリで日本からでも視聴することができる。なお、UR Play のサイトやアプリでは番組を視聴する際に字幕の有無や再生速度の設定ができる。今回補助教材として使う Svenska förklarad (スウェーデン語解説) は文学史やスウェーデン人作家、スウェーデン語の方言などについて各分野の専門家達が解説する高校生向けの番組で、UR Play で視聴できる。カーリン・ボイエについての放送回では、彼女のバイオグラフィーおよび代表的な詩や小説を 11 分間で簡潔に紹介しており、これを講読の授業の合間に視聴する。また、一度観ただけでは聞き取りや内容の理解が難しかった学生やもう一度観たい学生のために CLE (大阪大学の授業支援システム) でこの番組へのリンクを共有する。

3. 指導実践計画

3.1 北欧文学特別演習 b

今年度、田辺が担当するスウェーデン文学ゼミの受講生は全員で 6 名である。しかしながらこの中で梅谷の担当するスウェーデン語の講読授業(スウェーデン語Ⅱ b(B))を受講するのが何人になるのかは、授業の計画を立てる時点では明らかになっていない。一応、全員にスウェーデン語講読の授業を取るように勧めるが、ゼミの授業と講読の両方とも履修するのは大概 3 年生が中心となる。そのため前半で詩を 6 篇訳し、解釈と討論を行う。後半は講読の授業を履修している 3 年生がテキストの精読をほぼ

完了し、解釈と分析にとりかけられる頃合いを見計らって、以下のような授業計画を立てた。1学期間は15回の授業があるが、講読の授業との協業に充てる時間は毎年、大抵8回～多い年で10回ほどである。今年は詩と短編小説の両方を扱うことになったため、通常よりも回数を増やし、10回分を充てる。

10 回分の文学テキスト分析実践内容

- 第1回：Karin Boye の詩を読む① “Jag vill möta...”
- 第2回：Karin Boye の詩を読む② “I rörelse”
- 第3回：Karin Boye の詩を読む③ “Nattens djupa violoncell”
- 第4回：Karin Boye の詩を読む④ “Odyssevs vid masten”
- 第5回：Karin Boye の詩を読む⑤ “Hur kan jag säga...”
- 第6回：Karin Boye の詩を読む⑥ “De mörka ånglarna...”
- 第7回：Karin Boye の短編小説を分析する① “Den blinda”
- 第8回：Karin Boye の短編小説を分析する② “Den blinda”
- 第9回：Karin Boye の短編小説を分析する③ “Den blinda”
- 第10回：グループ発表

第1回～第6回の詩を読む回では一人が1篇の詩を担当し、前々日までに詩の試訳を完成させ、単語帳、疑問点などを列挙したものをすべて予習資料としてゼミ生全員とあらかじめ共有しておく。当日担当者が原詩を音読したのち、担当者が訳出作業で解決できなかったところ、誤訳しているところ、新たな訳の提案などを全員で検討する。最後に詩の主題とメッセージについて互いの意見を交わす。教員は一通りの意見が出た後、付け加える点、再検討すべき箇所があれば適宜発言するが、あくまでも学生が主体となって議論できるように、舵取り役に回る。この詩の訳と解釈をめぐる作業を1時間以内に終了させる。残りの半時間は補助教材として用いる「スウェーデン女性人名事典」のボイエの項目を最初から輪読していく。ボイエの項目は最初と最後は作家に関する伝記事項でまとめられているので、その部分は全員で訳出する。中間部に記されている作家の作品論、思想背景に係るところは、分担者を決めて内容を発表してもらう。

第7回～第9回の短編小説の分析は、講読授業でほぼ精読が完了したことを確認したのちに行う。もし完了していなければ、1回目の分析時間は作品の概要を全員で確認する。作品の周縁研究項目、テキスト分析項目を確定し、グループワーク内で予習資料の分担作業を進める。第8回と第9回では、グループワークを発展させ、前半で扱った詩の分析、作家に関する参考文献も活用しながら、さらに考察と分析を進める。第10回目に3年生を中心にしたグループ発表を行ってもらう。4年生は主として批評側に立ち、コメントを述べる役割を担う。役割分担については第8回目の時に明らかにしておく。

3.2 スウェーデン語Ⅱ b (B)

これまでに梅谷が担当してきたフィクション講読の授業では、スウェーデン語で書

かれた短編小説 1～2 作品を 1 学期かけて精読し読みきることを主な目標としていた。授業の流れとしては、毎回の授業で進む範囲をあらかじめ指定しておき、学生を一人ずつ当ててテキストを音読させたうえで予習時に考えてきた和訳を発表してもらい、必要に応じて文法解説をして学生からの質問に答える、というものであった。この授業形態では当てられた学生と教員の一对一のやりとりが多くなる傾向にあり、受講者数が多い場合にはあまり向かない。スウェーデン語専攻 3・4 年生向け授業は選択制のため学期によって受講者数が異なるものの、2019 年度までは講読の受講者数は多くても十数人だったのでこの授業形態でも特に問題はなかった。しかし 2020 年度以降はコロナ禍で留学を断念または延期する学生が多かったこともあり 3・4 年生向け授業の受講者数の増減が激しく、梅谷担当の講読の授業は 30 人近くになることもあった。このことをきっかけに受講者数が多数の場合の授業形態を考え直す必要があると考えるに至った。そこで今回文学ゼミとの協業をするにあたり、これまでのように単に精読するだけでなく講読作品「盲目」の内容や時代背景、作者のカーリン・ボイエに関するグループ発表を学生に行ってもらうことにした。1 学期 15 回の授業のうち 12 回を以下のとおり精読とグループワーク、グループ発表に充てる。

精読とグループワーク・発表の計画内容

- 第 1 回：「盲目」精読①
- 第 2 回：「盲目」精読②
- 第 3 回：「盲目」精読③
- 第 4 回：「盲目」精読④
- 第 5 回：「盲目」精読⑤
- 第 6 回：「盲目」精読⑥
- 第 7 回：「盲目」精読⑦
- 第 8 回：「盲目」精読⑧
- 第 9 回：グループワーク① グループ分け、発表テーマの決定
- 第 10 回：グループワーク② グループ発表の準備
- 第 11 回：グループ発表①
- 第 12 回：グループ発表②

第 1 回～第 8 回の精読では予習範囲をあらかじめ指定しておく。授業内でグループワークの時間をとり、受講者 19 人を 4～5 人のグループに分けてそれぞれが予習で考えてきた和訳を比較し、話し合っただけで考えた和訳を CLE に用意された Google ドキュメントの文書ファイルに書き込んでいく。Google ドキュメントは複数のユーザーが同時に一つの文書ファイルを編集することができるため、全てのグループが 1 つの文書ファイルで作業を行うことで、他のグループの訳を参考にすることもできる。グループワークの間、教員は教室を回り、学生の話し合いに参加し、質問があれば対応する。グループワーク終了後、複数のグループが読解に苦労していた箇所を取り上げ、解説を行う。その後、テキストの次の範囲についてグループごとに話し合いを行う。各グループが Google ドキュメントに書き込んだ訳は授業終了後に教員が目を通し、コメントをつけ

て次回の授業のはじめにフィードバックのコメントおよび追加の解説を行う。

第9回～第12回はグループ発表に向けた準備および発表に充てる。グループ発表については、文学ゼミの学生にはゼミで読んだボイエの詩およびボイエについての紹介文についての発表を行ってもらおう。また、その他のゼミ（言語・社会・歴史）に所属する学生も複数のグループに分かれて発表を行ってもらおう。発表のテーマは『カーリン・ボイエ著「盲目」；短編小説と語学練習問題』の「(1) 導入」で「盲目」が書かれた時代の歴史的・社会的・文化的背景について把握するために用意された以下の質問をもとに決める予定である。

- ・ Den blinda kom ut som del av novellsamlingen Uppgörelser 1934. Vad känner du till om Sverige under mellankrigstiden (1918-1939)?
（「盲目」は1934年発表の短編集『論争』に収録されている。あなたが戦間期（1918年～1939年）のスウェーデンについて知っていることは何か？）
- ・ Vilka möjligheter fanns det för unga eller ogifta kvinnor och flickor att försörja sig på den tiden?
（この当時の若い女性や結婚していない女性が生計を立てるにはどのような方法があったか？）
- ・ Vilka hjälpmedel för synskadade fanns det på 1930-talet? Hur levde man då med en funktionsnedsättning? Hur skiljer det sig från idag?
（1930年代の視覚障がい者の支援にはどのようなものがあったか？当時、障がい者はどのように生活していたか？現在とはどのような違いがあるか？）

4. 授業実践にあたっての展望と注意点

4.1 北欧文学特別演習 b

今年度は北欧文学ゼミ（デンマーク語専攻とスウェーデン語専攻双方のゼミ）におけるゼミ生の学年別の登録人数が例年と大きく異なることが予想された（ゼミメンバーは前年度の2月にはほぼ確定する）。そのため春・夏学期は言語別ではなく学年別に授業を行い、秋・冬学期は専攻語別に授業を行うように授業形態を変更した。その結果、秋・冬学期だけで各言語の詩訳と詩の解釈、短編小説の分析を同時に行わなければならないとなった。よって以下のような展望と注意点が必要になると思われる。

- 短編小説の教材を講読授業の梅谷と相談した際、梅谷から提案された教材『カーリン・ボイエ著「盲目」；短編小説と語学練習問題』は短編小説の分量、内容のレベルからみて3・4年向けの講読授業、文学ゼミの双方にとって極めて妥当であると判断される。また梅谷が教材研究の項目で先述しているように、導入部分で作品を理解するための質問が設定されている点や語彙リストが付されている点など、ゼミの学生が作品の読解や、分析のテーマを見出す上で大きなヒントとなるだろうと期待できる。
- 今回ゼミ学生6名の中で実際に梅谷のスウェーデン語講読授業に登録したのが、2名であることが10月の段階で明らかになった。つまり講読授業に参加しない4名

は第 7 回～第 9 回で行われる短編小説の読解・分析作業に臨む前に十分な自習が必要となる。とりわけ、それらの学生を短編小説のテキストに参加させるための準備策（作品の内容を理解させるためのサポート）が求められているということを想定しておかねばならない。

- 今回扱うカーリン・ボイエの時代がモダニズムの走りとなる時期で、思想の新旧論争が非常に激しいことである。韻文、散文の双方において、作品の周縁研究と理解にそれなりの時間が必要になることを予測しておかねばならない。

4.2 スウェーデン語Ⅱ b (B)

講読テキスト「盲目」の分量は 5 ページ (175 行) と決して多くはないが、一文が複数の行にまたがり、文構造が複雑なものがいくつかある。また「盲目」には参考にできる邦訳がなく、教材として使用する『カーリン・ボイエ著「盲目」；短編小説と語学練習問題』には語彙の注釈はついているものの文法の解説は載っていない。そのため授業準備の段階で教員がしっかりテキストを読み、文構造などの文法面でスウェーデン人教員に確認して日本語訳を用意したうえで授業に挑む必要がある。

また、この授業は 3・4 年生向けの選択授業であるためスウェーデン語学習歴 2 年半の 3 年生と学習歴 3 年以上の 4 年生とが混在する。使用する教材が CEFR の B2～C2 レベルの学習者を対象とするものなので、3 年生には少し難易度が高い可能性がある。そのため、精読の際にグループワークを行なって学生同士で話し合いをすることで、予習時点で分からなかった部分を互いに補い合ってより理解を深められることを期待する。

資料・参考文献

Boye, Karin

1934 “Den blinda”. *Uppgörelser: skisser och noveller*. Stockholm: Bonnier.

Tegsveden Deveau, Sofi

2019 *Den blinda / Karin Boye ; novell med språkövningar*. Umeå: LYS.

Red. Möller, Daniel・Schiöler, Niklas

2016 *Svensk poesi*. Stockholm: Albert Bonniers Förlag.

吉村俊子・安田優編著

2013 『文学教材実践ハンドブック－英語教育を活性化する』. 東京：英宝社.

インターネット上の資料

Litteraturbanken: <http://litteraturbanken.se>

Svenskt kvinnobiografiskt lexikon: <https://skbl.se/sv>

UR (=Utbildningsradion): <https://www.ur.se/>

UR Play: <https://urplay.se/>